

北九州市の金石文集成（四） 小倉北区編

中村修身

はじめに

北九州市小倉北区に関連する金石文の紹介である。北九州市内の金石文の紹介は三回に亘って行っており、その続きでもある。小倉北区は近世小倉藩の中心地でもあり、資料が多い。しかし、多くの資料が本来の場所から持ち出されていることが多く、収録から漏れているものもあると思われる引き続き紹介をするつもりである。

資料の紹介にあたって、各金石文に整理番号を付けた。基本的には年代順とした。原則として明治元年以降は収録しなかった。基本的には年代順とした。原則として明治元年以降は収録しなかった。

物件ごとに、銘の書かれている物件、その現所在地、銘の書かれている部分そして銘の順に記し、各物件の紹介の後にそれぞれに対する雑記を加えた。

多くの資料で判読に悩んだが、今後の歴史研究の一助となればと思いい史学論叢に発表する場の提供をお願いした。

なお、広寿山、清水寺、開善寺、到津八幡宮、心光寺、大隆寺、慈濟寺などに銘文が刻まれた梵鐘ないしは罌口などの存在が伝えられている。それらの多くは、文久三年五月に小倉小笠原藩より出された毀鐘鑄砲令や第二次世界大戦にもなう金属回収よって鑄潰されたと思われる。今となっては実物を見する機会を得られない。『小倉市誌上巻』『太宰管内志』などにそれらの銘文の多くが収録されているので参照されたい。

貴重な文化財に触れることを許可してくださった広寿山、清水寺、安

国寺、阿弥陀寺、安全寺、北九州市立自然史歴史博物館など多くの方々、報告の場を与えてくださった別府大学の白峰旬先生をはじめ諸先生に深くお礼申し上げます。

銘の紹介

1 足立山鏡 八幡東区東田二丁目4 北九州市立自然史歴史博物館

足立妙見大菩薩

御宝前

奉施入鏡一面

右志爲在原熊市目病清除

明鏡安楽也兼女弟子宇佐氏

所生愛子之息佐延命故也

承安四年二月卅日 宇佐氏敬白

雑記 『歴代藩主記録』『神社誌』などによると、寛政七年四月九日五代藩主小笠原忠苗が足立山の妙見社に参詣した折、家臣等が諸準備のため上宮後堂へ御休所を造ろうと少々土を掘った所、土中より和鏡、湖州鏡など合計九面が出土。そのうち一面に右銘が刻まれていた。さらに、和

鏡一面に薬師如来坐像が刻まれている。外の和鏡には格子状文が刻まれている。

2 観世音菩薩像 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺
本体胎

堀越 隠篋 石田
横城 丸ヶ口村

別當 処宝玉院

清水山興福寺宝平院 順良 宇都宮

地主権現正観世音菩薩 奉誂テ作ル

仁治元年 宇都宮實信

三月十八日 上人作

本体蓋

廿三日出来

雑記 十三世紀に造られた木造仏の胎内に、江戸時代に書かれた銘である。書かれている内容は十三世紀の造仏に関することが記されている可能性が高いので、ここに置く。

3 六角ノ石碑 小倉北区採園場二丁目 愛宕神社

正面

謹奉讀誦法華妙典一千部爲玉室興公禪定門
時于元龜三年潤正月廿五日展供養成就者也

左面

婦眞玉室興公禪定門

永祿六年癸亥四月十五日

雑記 『太宰官内志』は六角ノ石碑に銘が刻まれていると記している。今は寄せ集められ六地藏塔の一部となっている。また、六地藏塔から約二メートル離れた位置に一字一石経の小石が散乱しているも、当六地藏との関係は調査を要する。

4 心光寺殿清譽惠高大姉位牌 小倉北区田町13-9 浄土宗阿弥陀寺

正面

心光寺殿 清譽惠高大姉 淑霊

裏面

橋朝臣高橋三河守秋種公室俗名武姫

大友氏女弘治元年乙卯七月十四日逝

雑記 当位牌は、昭和期後半に心光寺の廃寺に伴い阿弥陀寺に移され、祭られている。安全寺に祭られている夫・高橋鑑種位牌(5)より当位牌の方がわずかに大きいことや高橋鑑種が自分の名を間違えることは普通では考えがたい。

5 高橋鑑種位牌 小倉北区山門町10-30 曹洞宗安全寺

正面

安全寺殿 竺心宗仙大居士 神儀

裏面

天正七年巳卯四月二十四日逝

俗名參河守高橋鑑種

雑記 高橋鑑種は弘治元年から天正七年の亡くなるまで、田川郡香春に本拠を置き田川郡規矩郡を領有していた。彼の死後は高橋元種が跡を継いだ。なお、天正七年当時、安全寺は後の小倉城松の丸にあったという。

6 石垣の石 小倉北区金田二丁目3 (財) 北九州市藝術文化振興財団
村上八郎左

東組
七年八月八日

雑記 当銘は小倉城普請所の石垣に墨で書かれている。銘の「七年」は、慶長七年と解する研究者が多い。村上八郎左は慶長七年頃小倉細川藩の
大身にて篠崎屋敷に居住。

7 慈濟寺鰐口 小倉北区馬借 慈濟寺旧蔵

正面右

規矩郡小倉津片野村

医王瑠璃光如来者豊之前後兩國之大守

双眼晴由不快爲願力鰐口一丁建鑄焉而

正面中

福山二介同源次欽奉寄付云

正面左

奉嬰御宝殿所矣眼睫日新有癒好使写

明□如磨鏡豈有疑瞻之仰之至祝至禱

時元和第三戊午三月如意願成就所矣

裏面

右之銘大道九兵衛打之也

雑記 今は、北九州市立自然史歴史博物館に保管されている。大道九兵衛は小倉鑄物師である。

8 高山定直墓 小倉北区鑄物師町4-8 長圓寺

元和三〇〇丙申年

高山孫太夫定直墓

子己十月二十三日

雑記 鑄物師町祇園社の初代宮司という。後世の建て替えである。

9 石造燈籠（一対） 小倉北区内二丁目2 八坂神社

奉建立

爲豊之前後兩國之太主相公

御眼病御平癒石燈籠二基

元和四年三月七日 願主入江平内入道

雑記 二基ともに同文が彫られている。西祇園町にあった祇園社（八坂神社）が現在地に移った折、当燈籠も移設された。なお、昭和五〇年代に吉村範真氏が当燈籠を模倣し奉納した燈籠も一対ある。

10 六地藏塔 小倉北区上富野四丁目2 延命寺

寛永十年癸酉

卍 涼安浄心禅定門

三月十兆目

11 壽月院仙養僧都墓 小倉北区上到津三丁目 10 真言宗遍照院

承應元年

壽月院仙養僧都靈位

□月十六日

雑記 遍照院によると、当墓は古船場天神島の如意山吉祥寺の薪山である如意山（到津の森公園音楽堂）に祭られていたが、軍の命令により現在地（編照院）にお祭りすることになったという。

12 宮本武蔵碑 小倉北区赤坂四丁目 8 手向山公園

正面上段

天仰

實相

圓満

兵法

逝去

不絶

正面上段

于時承應^三年^甲四月十九日孝子敬建焉

正保^二乙^西曆五月十九日於肥後国熊本卒

播磨赤松末流新免武蔵玄信二天居士碑

兵法天下無雙

臨機應變者良將之達道也講武習兵者軍旅之用事也游心於文武之門舞手於

兵術之場而逞名譽人者其誰也播磨英産赤松末葉新免之後裔「武蔵玄信号

二天想夫天資曠達不拘細行蓋斯其人乎為二刀兵法之元祖也父新免号無二為十手之家武蔵受家業朝鑽暮研思惟考索灼知十「手之利倍于一刀甚以夥矣雖然十手非常用之器二刀是腰間之具乃以二分為十手理其德無違故改十手為二刀之家誠武劔之精選也或飛真「劔或投木戟北者走者不能逃避其勢恰如發強弩百發百中養由無除于斯也夫惟得兵術於手彰勇功於身方年十三而始到播磨新當流興有馬「喜兵衛者進而決雌雄忽得勝利十六歲到但馬国有大力量兵術人名秋山者又決勝負反掌之間打殺其人芳声滿街後到京師有扶桑第一之「兵術吉岡者請決雌雄彼家之嗣清十郎於洛外蓮臺野龍虎之威雖決勝敗触木刃之一擊吉岡倒臥于眼前而息絕豫依有一擊之諾輔弼於命「根矣彼門生等助乘板上乘治温湯漸而復遂弃兵術雉髮畢而後吉岡傳七郎又出洛外決雌雄傳七袖于五尺餘木刃來武蔵臨其機奪彼木刃「擊之扶地立所死吉岡門生含「密語云以兵術之妙非所可敵對運籌於惟惶而吉岡又七郎奇「於兵術會于洛外下松辺彼門生數百人以兵杖「弓箭忽欲害之武蔵平日有知先之才察非義之働竊謂吾門生云你等為傍人速退縱怨敵成群成隊於吾視之如浮雲何恐之有散衆敵也以走狗「追猛獸震威而販洛陽人皆感嘆之勇勢智謀以一人敵万人者實兵家之妙法也先是吉岡代々為 公方之師範有扶桑第一兵法術者之号堂于「靈陽院義昭公之時召新免無二与吉岡令兵術決勝負限以三度吉岡一度得利新免兩度決勝於是令新免無二賜日下無双兵法術者之号故武「蔵到洛陽与吉岡數度決勝負遂吉岡兵法家泯絶矣爰有兵術達人名岩流与彼求決雌雄岩流云真劔請決雌雄武蔵對云你揮白刃而尽其妙「吾提木戟而顯此秘堅結澁約長門与豊前之際海中有嶋謂舟嶋兩雄同時相會岩流手三尺白刃來不顯命尽術武蔵以木刃之一擊殺之電光猶「遲故俗改舟嶋謂岩流嶋凡十三迄壯年兵術勝負六十餘場無一不勝且定云不敵之眉八字之間不取勝每不違其的矣自古決兵術之雌雄「人其算數不知幾千萬雖然於夷洛向英雄豪傑前打殺人今古不知其名武蔵属一人耳兵術威名遍四

夷其譽也不絶古老口所銘今人肝誠音哉「妙哉力量早雄尤異于他武藏常言
兵術手熱心得一毫無私則恐於戰場領大軍又治国豈難矣豊臣太閤公嬖臣石
田治部少輔謀叛時或於撰「劄大阪 秀頼公兵乱時武藏勇功佳名縱有海之
口溪之舌寧説尽簡略不記之加旃無不通礼楽射御書数文況小藝巧業殆無為
而無不為者歟「盖大丈夫之一赫也於肥之後劄卒時自書於 天仰實相圓滿
之兵法逝去不絶之字以言為遺像焉故孝子立碑以傳于不朽令後人見嗚呼偉
哉
〔正面下段二十一行。「は改行頭。」〕

雑記 当碑は初代宮本伊織が小笠原忠真公から武蔵石塔山並び薪山とし
て拝領した手向山に養父武蔵を偲んで建てたものである。一時期他所に
移されていたが、いつの頃からか手向山に戻されたと聞く。

13 嶽善士墓 小倉北区清水四丁目5 円応寺墓地

寛文二壬寅天

秩嶽善士靈位

九月初九日 吉兵衛

雑記 高さ一八〇センチメートルの圭頭墓である。本来の姿（台座がな
くなっている）であれば二メートルを超える高さである。昭和二十八
年に現在地（清水四丁目5）へ寺が移転した折に、当墓も移設された。

14 鏡□院殿覺□智国大姉墓 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

寛文七丁未

鏡□院殿覺□智国大姉

十月八日

15 西玄周墓 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地
寛文八年戊申
蓬月齋法橋一鷗先生
六月廿九日

雑記 八代目蓬月齋法橋一鷗である西玄周の墓は形式や文面から再建の
可能性を否定できない。玄周は正保元年小倉に来て小笠原忠真に仕える。
忠真に願いでて小熊野に広大な土地を賜り、薬園とした。

16 燈籠（一对） 小倉北区上到津三丁目10 真言宗遍照院
奉献石塔籠壹具
豊前州廣壽山 當州牧小笠原從四位
大猷院殿神前 行遠江守源朝臣長眞

寛文九己酉年

七月十七日

雑記 二基ともに同銘が刻まれている。笠に三葉葵文が陽刻されている。
廣寿山境内東照宮に三代將軍家光位牌の安置にもなつて二代藩主忠雄
（長眞）が奉納した燈籠である。なぜ遍照院にあるのかは諸説ある。

17 小笠原忠真墓 小倉北区妙見町 廣壽山福聚寺墓地

笠正面

豊前州

遠江守

□ 小笠原

德叟公

最碑圖

柱正面

公諱忠貞總州古河產也其先出於清和皇帝中子桃園親王之裔親王生經基是日六孫王始賜源姓爲鎮東將軍經基生滿仲滿仲後七世生「長清居甲之小笠原承安皇帝賜以爲氏長清七世孫日貞宗英明有德望世以禮法稱尤善騎射爲建武皇帝見器重焉詳見譜圖記中貞宗十一「一世孫日貞慶貞慶生秀政秀政娶得川氏子男五人公居其次幼有大志或勸以細檢則笑日燕雀豈知鴻鵠哉聞者嘆異年十三入朝江戶「大相國秀忠公親祝加冠特賜忠字於名上十五拜朝散大夫號大學助頃秀賴將軍與「東照大權現有隙西據攝州大坂城元和改元夏五月初 大權現將大相國自發擊之屯于岡山公與父秀政兄忠脩共從步騎數千啓向阿邊「野初七日味爽秀政語二子日今日有進無退以身殉國是其時矣不可失也兄弟諾日大人幸無勞慮不肖輩不敢辱家聲秀政大喜士卒聞「之激勵彌倍其氣阿邊野道路前有坑塹森豐前守大野修理亮竹田永應等當塹而拒分列精騎六千翼軍左右聲勢甚銳秀政率二子鼓行而「進衝其中堅乘其敵陣辟易追擊至踰塹城中敵兵忽突出合鋒急接公父子兄弟勇悍鎗奮力搏戰血刀甚多時公與秀政身被大創者七小「疵無算公使士森尾橫川牧野原氏等窮精脫急忠修身登群鋒鏖其敵氣鏖戰亟力當陣而致至是大權現暨大相國方得連揭旗鼓進擊「破之既而城陷秀賴自殺大相國摩下親見公與秀政力戰重傷忠修奮前死敵特遣侍醫宗伯山岡某至營視傷賜醫藥病復遣內侍至吊忠「修抵暮秀政殂大權現父子深悼惜焉及後賞功勞績令公繼秀政領信州松本城監羽林右騎公同胞女弟二人大相國自養爲子姉配阿「波守峰須賀至鎮妹配越中守細川忠利特命大臣土井利勝監護婚禮蓋爲內在大相國甥孫而有軍績所以眷遇益隆大權現振旅東還「詣洛居二條城大會諸將命伶人奏舞樂福島正則加藤嘉明侍座左右時久管弦不鳴群僚訝之因傷病未愈後衆而至有待公也

大權現「召至膝前日爾何來之晚耶爲耀公傷創於列座顧謂福島加藤日是鐵石孫也左右群僚殊愕愕方命作舞樂其重公若是丙辰夏四月「大權現薨大相國立丁巳春徒公播州明石益封十萬石繼忠修有子名長次方在祿公爲鞠育恩踰己子大國知公欲讓封長次別賜長次「六萬石典龍野城公使家臣有名者總歸長次軍器財物悉付與之時人服公仁愛而益親寬永壬申春正月大相國薨

左面

〔二〕の面十六行。「は改行頭。」

家光大將軍立徒公豐前小倉益封十五萬石又賜弟忠知四萬石次弟長昌三萬七千石更益授長次八萬石甲戌秋七月 大將軍朝京師公扈「從班列即拜中大夫丁丑冬十月益田四郎者爲妖惑結黨四萬餘人據肥州有馬城叛 大將軍遣板倉內膳正率石貝將監討之時公侍江戶「丞命還小倉以其據守鎮西扼要路爲準備焉尋遣伊豆守松平信綱往征有馬復下書論公日若細川忠利黑田忠之鍋島勝茂等須爲先鋒攻「之忠貞同率長昌長次殿爲後備或有計議宜與信綱相策定公承 鈞命率步騎八千人到有馬依西山爲營二月二十七日鍋嶋兵先登入城「寺澤兵庫助陣於公與賊之間中公謂諸士日大將軍命忠貞守諸軍殿君命固不可違然軍志之法隨機變今以天下軍擊天下賊何適不「可事及其時母後機宜即督長次等排寺澤陣奮先直入破賊第二壘賊大敗反奔還城與長次俱進立赤幟於城門然後諸軍競得爭馳粉紜「圍城公乃論諸將日大抵攻城之道有攻而不圍有圍而不攻或急而取之或緩而克之要在固審其勢今賊勢已危旦夕自「何用疲勞士卒當引「兵正隊以待其弊是所謂不戰而屈人之兵不攻而拔人之城者也以伊豆守善之於是引兵復後列陳擐甲以待次日賊果敗沒一若公論伊豆守「凱旋具告大將軍至破賊之捷出公之策居多也正保乙亥冬十一月 大將軍命大隅守島津光久於武之王子行追犬射諸侯大夫咸奉「鈞駕時召賜坐問日小笠原家世傳善追犬射有諸公日有之日築埒列隊其法如何公日島津奉命面行其事臣忠貞真何容贅 大將軍厚之頃爾觀「騎出而

追犬隨叩應如撞巨鐘又問追犬射有說乎日練武也建武帝朝詔制追犬射臣祖貞宗上疏請之意在安不忘危治不忘亂練心練力「爲軍務之急要強武之良法也」大將軍顧謂左右日忠貞一言足備今日之講武百僚榮之慶安己卯夏四月大將軍薨「家綱上將軍立命公藩西鄙統長崎事竟文癸卯冬遷侍從拜冢嗣長眞朝散大夫授遠州刺史每公入見再三加勞稱日小倉待從而名天下「推爲大老云昔貞宗深信佛乘就信州伊賀良莊創開善寺請清拙禪師爲開山祖舉家老幼俱受戒法曾書遺訓日爲我子孫者當以禪宗爲「心傍探顯密公常念遺訓惟恐不及凡當世諸有名宗匠數詣禪道而授三諦於慈眼大師稟兩部於僧正亮運傳阿字觀於阿闍光宥歲甲辰「我師即非和尚自長崎觀隱老和尚上黃檗次小倉開善公出接師日靈山話頭居士還記得麼公微笑師日一念圓明無古今公日秋夜長江雲自「淨天風吹月上波心師日且喜居士不忘付囑公留齋拜送而別後一年師辭黃檗擬回唐山還次小倉公留居金粟園因求法名執師資禮乃

裏面

〔この面十七行。「は改行頭。」〕

授名紹助字德叟先是公於豐城東足立山建大權滅祠每遇諱日必自趨奉祀乙巳春更造殿堂請我師薰蒞山日廣壽寺日福聚一新叢規鐘「鼓清肅公時乘間參扣宗要存問往復不踰五日寧匪靈山一語機感有在哉比回自江戶取道進黃檗謁隱老和尚暨木庵和尚各贈以揭有仁「風偃四野瑞氣映千祥之句丁未秋七月偶得微恙淹滯彌月四方親戚及牧伯候日其狀上將軍聞而憂之累賜書問又以長眞觀侍江戶命「還小倉省養更令國工在神京者趨致醫治然公心早已知其不可起至十月朔遣近侍到廣壽致問日忠眞處病殆乎七十日不惟空苦惱相亦「不作安問想向匪淡蒙啓發焉能臻此設臨風燭當自知是不知向上別有工夫否和尚爲加證明直示徑要及十五日長眞至告鈞眷極篤「公乃拜手稽首謝恩誨以忠義綱常囑以國家法門者諄諄外不及他言十八日晡時安坐而終後五日葬于廣壽山之陽春秋七十有二其在疾「也合郡士庶憂懷懇禱固不在

言若隣國侯伯黎民庶類亦至投誠祝禳及于逝也府城內外以薄街衢巖巖聞者無不失聲而哭哭而盡哀矣「長眞含悲往江戶國之禮也一時重臣若酒井忠清阿部忠秋稻葉正則久世廣之諸公及列侯大夫畢至修弔禮纒經五十日期「上將軍召長眞告之日卿父侍從歷事四朝勛業甚顯孤自仰爲國家重器以光一世今既亡之靡勝嘆惜茲令卿繼承家緒莫墜卿家父風進拜中「大夫恩寵嘉命鮮有與同其首膺者焉公爲人仁慈恭謹不妄言笑平居正坐如陪尊長或至大事迫前不爲少遽其色未嘗挾貴接人倚勢御下「人皆敬畏甚於背芒蓋其勇威之所然一於天性之所成也初家光先將軍索白麾赤扇於公公家法製進及上將軍索白麾扇一若前例加賀守「堀田正盛爲先將軍近密一日過公請出其在大阪所攬鎧甲至見傷血留痕削而舐之日是所謂武門點眼藥也左衛門佐有馬康純每來「相訪於公舊創處舉手加額日一代元勳百世可鑑又藝州太守邀公享歸適遺手巾一客拾以珍襲謂人日我近新製兜鑿未飾其裡面庶欲裁「此不巾像公功德其爲武門師表推崇者如此若乃公卿貴介及文武官僚來求弓矢以當神符者甚夥今略取著者書之餘莫盡載洞於公荷「有墨舊之庇故知之者詳嘗與公晤語或問其勳績公便覺額日我豈有此事縱有亦無得而記且爲將士臨場致功其職耳復何自尚之爲念「其忠實之言近世不能復見者也嗚呼小笠原之世以忠義功名彰著代不乏人至於修道持德之美自貞宗而以降惟公一人而已公有四男日長安「日長宣日長眞日英眞安與宣俱拜朝散大夫先公而卒女二人長適筑前守黑田光之次適刑部侍郎松平賴元姪賴參州吉田刺史直吉

〔この面十七行。「は改行頭。」〕

右面

豐後木付刺史姪孫長勝中津刺史甥孫松平正能阿淡二州太州細川綱利肥後州太守公內外門類可謂光盛當世者矣長眞將立碑銘昭示來「葉徵洞志之洞謂先豐君出所功業在天下人口碑鏗錚作金石奚待奚嫩其辭之爲重耶然匪石無以圖久匪銘無以傳遠惟久與遠是不得「不詳述其功直書其事勒諸碗琰以

傳後世爲致 銘日

「偉哉源氏猶水之源其源遡遠支流滋繁承至長清號小笠原有美貞宗中興其門昭昭盛業典刑具存伊誰式之惟先豐君德出性情信及魚豚「一振勇威三軍星奔朝運初啓廣樹功勛上日咨爾眞國之藩維官維爵以賜孔恩歷仕四朝年踰七旬志操雄時海內推尊間日訪道棲神「竺墳金湯叢社裴張仲昆一旦觀化葉落歸根佳城鬱鬱壽山之原茲譖茲望終不可諉有世嗣續志有名清芥勒銘不朽永配乾坤
〔この面〕まで六行。「は改行頭。」

寛文九年龍集己酉八月甲戌

廣壽山福聚禪寺嗣法沙門明洞法雲謹撰併書

孝男州主從四位下行遠江守源朝臣長眞立焉

雜記 小笠原忠眞は寛永九年將軍家光公の命により豊前小倉藩（十五万

石）を賜り、同年十二月十三日小倉に入部。廟前には左右それぞれに

十一基の燈籠が奉獻されている。燈籠は奉納者の氏名が記されている。

左側は廟側から小笠原從四位行遠江守源朝臣長眞、那須氏永貞院紹善、

小笠原隼人源眞英、宮本伊織源貞次、大羽内藏助源政明、二木勘右衛門

源正勝、小笠原龍之助源長信、原三左衛門源昌之、丸田權右衛門藤秀興、

葉山玄□源昭昌、豊田奎進源重之の名が記されている。右側は廟側から

小笠原從四位行遠江守源朝臣長眞、那須氏永貞院紹善、小笠原隼人源眞

英、吉岡三郎兵衛源康貞、長坂源兵衛守輔、下枝五郎三郎慶任、三好又

次郎源貞憲、澁田見勘解由平久之、伊藤作右衛門景定、山田頼母源正虎

の名が記されている。なお、右側は眞英の次の燈籠には名がない。

18 高田又兵衛墓 小倉北区京町 生性寺境内

寛文十一年^{辛亥}

高徳院 劍譽崇白居士

正月廿三日 俗名 高田又兵衛吉次

雜記 高田又兵衛は元和九年小笠原忠眞に仕える。慶安四年四月十一日、長男吉深、弟子觀興寺七兵衛とともに十文字槍の奥義を將軍徳川家光に披露。寛永十五年二月島原の乱に小倉藩士として出陣。

19 即非老和尚墓 小倉北区寿山町7-6 廣壽山福聚寺墓地

正面

開山上即下非老和尚禪師之塋

裏面

寛文十一年歲次辛亥八月戊戌

性安明覺

嗣法門人明洞百拜立石

性寬明憧

雜記 黄檗宗の僧侶であり、小倉小笠原藩の菩提寺廣壽山福聚寺の開祖である。

20 長江院殿松峯宗說居士墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

寛文十一年^{辛亥}

◎長江院殿松峯宗說居士

十月三日

雜記 当墓は形式などから見て、古い墓が痛んだため再建された可能性が極めて高い。

21 太刀 八幡東区東田二丁目4 北九州市自然史歴史博物館

表面

一肥前國住出刃守藤原行広以阿蘭陀鍛作之

裏面

奉拝納到津八幡宮雄劍一振

寛文十二壬子年八月吉日

雑記 太刀箱および奉納札の銘文によると、延宝三年に小倉小笠原藩家

臣と西曲輪町人が藩主小笠原忠雄と小笠原家の武運長久を祈願して到津八幡神社に奉納したものである。

22 宮本伊織貞次墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

皆延寶六年^{戊曆}

◎忠巖紹徳居士覺靈

三月念八日

前宮本伊織源貞次

雑記 初代伊織は田原家より宮本武蔵玄信の養子となる。小笠原忠真に仕え、寛永八年家老職に就く。寛永十五年島原の乱に大将として出陣、惣軍奉行を兼ねている。小笠原忠真より武蔵石塔山並び薪山として手向山を拝領。『小倉市誌上巻』は法名を慈海院忠巖紹徳居士としている。初代宮本伊織の墓である当墓は形式などから見て、古い墓が痛んだため再建された可能性が極めて高い。明治二十年陸軍砲台構築のため宮本家墓地は当地に移転。以下宮本家墓はこれを参考とされたい。

23 貴布祢大明神鳥居 小倉北区長浜2 貴船神社

右柱

奉寄進 當村 八十郎 茂左エ門 長作 お〇榮

八助 小糸〇 市〇

正面額

貴布祢大明神

左柱

延宝己未八月吉日 五七 〇〇 〇三 長左エ門

〔原文、人名は横一列〕

24 燈籠 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

延寶七己未天九月吉祥辰^{白敬}

奉寄進石燈爐七〇即滅七福即生

諸願成就皆会満足武運長久

浦田長之丞 赤〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇

中村〇〇衛門 神田〇〇〇〇〇 下村九左衛門

江〇傳〇衛門 廣濱久〇衛門 末〇清兵衛

寺寫弥兵衛門 米田由兵衛

〔原文、人名は横一列〕

25 正定院蓮實妙體大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

延寶九年^{辛酉}

正定院蓮實妙體大姉

二月十六日 孝子 宮本勝次郎拜立

雑記 当墓は形式などから見て、何時の時期か再建された可能性が極めて高い。

26 圓解院妙奥童女墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

天和二年^{戌壬}

圓解院妙奥童女墓

十月八日

雑記 当墓は形式などから見て、古い墓が痛んだため再建された可能性が極めて高い。

27 灯塔 (一对) 小倉北区妙見山 妙見社上宮

御 豊前東小倉町奉公人中

寶 奉寄進 施主〔以下欠損〕

前 貞享元年申子六月吉日

雑記 二基それぞれに同じ銘が刻まれている。

28 慧眼院妙光信女墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

貞享三丙寅年

慧眼院妙光信女

閏三月初二日

29 八幡大神鳥居 小倉北区上到津二丁目 到津八幡神社参道

右柱

仁以麻威以鎮 立國家豊泰之基

正面額

八幡大神〔造り替へ〕

左柱

正爲緯直爲經開民物遂生之域

貞享五年歲次戊辰五月吉日

社司 謹識

30 水盤 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

以水盥掌

當願衆生

得清浄平

受持佛法

元禄二年三月吉祥日

顯房重基

正□正員

奉三寶弟子重康□定等金□

親成可正

武勝利時

31 福勝院觀宗實乘大阿闍黎之塔 小倉北区上到津三丁目10

正面

前福勝院観宗實乘大阿闍黎之塔

裏面

元禄四辛未年十月二十九日

雑記 遍照院によると、軍の命令により、当墓は古船場天神島の如意山吉祥寺の薪山であった如意山（到津の森公園の音楽堂）より移転、現在地にお祭りすることになったという。『小倉市誌上巻』廢寺の項に古船場天神島の如意山吉祥寺が挙がっている。同書に「三世福勝院快乘法印（字は觀宗）は豊前小倉の産にして、市瀬左衛常征次男にて、母は清秀が女也。延寶四年丙辰七月三日忠雄公命じて、清秀が院務を継がせ給ふ。其録百五十石也。後清僧となる。元禄四年辛未六月十七日隠居す。于時五人扶持を賜る。同年十一月二十九日寂す。」と記している。当墓は紛れもなく如意山吉祥寺の三世福勝院快乘法印の墓である。

32本浄院妙清月如大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

元禄七^甲年^戌

本浄院妙清月如大姉

正月十三日

雑記 宮本貞次伊織室墓である。当墓は形式などから見て、再建された可能性が極めて高い。

33法眼院知光要徹居士墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

元禄八^乙年^亥

法眼院知光要徹居士之碑

六月初十日 俗名宮本勝之佐源宣貞

雑記 当墓は形式などから見て、何時の時期か再建された可能性が極めて高い。

34石造燈籠 小倉北区内二丁目 小倉城内（八坂神社）

燈籠正面

元禄十二己卯

六月吉祥日 施主西氏

雑記 燈籠は一对あり、それぞれに同文が彫られている。八坂神社（祇園社）が西祇園町から現位置に移した折に、当燈籠も現位置に移された。

35覺月受心童女墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

元禄十三^庚年^辰

覺月受心童女

九月初四日

36永貞院殿慈林紹善大師墓 小倉北区妙見町 廣壽山福聚禪寺墓地

正面

永貞院殿慈林紹善大師墓碑

左面

故豊府君夫人永貞院慈林紹善大師墓誌銘并序

倉城太夫人諱藤法名紹善字慈林播之三木人姓那須氏其先出於綱基王第五男野州太守滿扶□扶後歷九世而至名為信者知那須因□而命氏為信五世孫名國信稱那須太郎屬土岐賴遠立戰功夫人大父焉貞□國信十一世而遷居

尾陽父重治又移住播州遂為播州人「重治三女其次乃夫人也母赤松氏各有家府世系可考焉先豐君忠真公初娶本多氏生二男長安長宣安病矣宣早卒三女長適筑主黑田「光之次大季適刑部侍郎松平頼元本多氏以寬永癸未十月逝夫人為其繼室生三男一女日忠雄日真方仲□女早世忠雄拜朝散大夫除

「中大夫進拾遺眞方朝散大夫備州刺史孫日清遙朝散大夫遠州刺史日基方日大力日正長正長為稻葉氏養女孫長適内匠頭松平昌興「次適大學頭藤堂高近次適周防守牧野康重次適土佐守淺野長澄次定婚美濃守稻葉正知字内以為榮夫人為先室設位事之如生而「息日歲時祭祀尤謹偕先豐君殆二十五年琴瑟和鳴未嘗見有搵容而閨門之内熙熙如春先豐君以仁政聞天下而夫人

之助為多也拾遺「七歲勒木馬習篠弓八歲學家禮夫人極愛之而其教甚嚴十歲當具威儀特先君之前一起一動依備規度今在中朝推以篤敬忠信稱者雖「□之姿□亦由夫人之啓迪也泪光君損館夫人斷髮躡貞院謝絕人事不與世接然於刑法一事探索以時之左右謂日賞善罰惡法之當「□□得一齋濟之夫人日賞罰固當然而往往見賞少見罰多者何也歷觀世間傷人者必無後是以深畏刑法人無貴賤莫不惡死好生下氏「豈可好死但以彼無智祀罪抵死譬諸

飛蛾赴燭最為可愍若濟飛蛾先須掩燭所謂放化者為民掩燭也倘或掩燭不密而坐見蛾投者不仁「也如其教化不□而□民死地則其行當歸于誰我豈徒愛下民將為我子孫菑禍根耳或謝人有所下及則日其必過也庶乎情恕誠導以使「其自改而不可強永其疵矣拾遺見閭閻有孝義者一一與之褒賞武□獨者隨

便給濟夫人聞之大喜稚之可以概見其性也夫人宿薰所資「自幼信佛來年步等臨書法華經幸念觀音普門品自歸倉城若創院宇造佛像若請大藏鑄法器在處植福者不可勝紀初我先師即和尚到「倉邑前教日先人夢城東阿練若處有

一應眞彩類文殊披香染衣坐寶華座手握團扇棒雙日輪覺而異之及先師寓金粟園夫人來禮見

裏面

「我米蘭之坐禪床持圓扇忽悟疇昔取夢感嘆至切不覺流涕便請其衣并扇子歸告先若君日有是□我始見禪師如推相識茲迎法施而「符子之夢夫豈偏然寔堯天佛日並照之兆也遂白「東都肇建廣壽諸先師為開山祖以成殊勝事業此又夫人之信有以為基也夫久屢有「異迹廣壽有簾生池植蓮滿塘夫人嘗□

此連來手挖藕絲續之命織西方三聖及二十五菩薩寬文壬子夏修幅既成請就壽山慶贊期以七「日福□三于佛名□散蓮為十七日有故夫人詣城南清水寺寺在層崖上踞級到圓通殿從者皆退夫人携詣妾拜大士畢繞殿三匝及命賀「忽有一□衣輿中夫人展而視之以謂大士像也再拜頂戴下到千手院從者有識字者觀之日是當麻仲將姬影也夫人不勝感喜馳使送「山與聖□同俱

辰□翌十八早夫人親臨設齋詳陳其事昔者天平寶字中仲將姬入當麻山發誓「淨忽感化佛來理藕絲以織淨土相蓋以「夫人與仲將姬同志願特得大士感賜其像者也先是城內別建道場安諸佛菩薩像夫人在此誦法華提婆品及普門陀羅尼品等經究以為「當課比老□勤利寒暑未嘗少急起居□息不釋數珠專念彌陀左右啓日春秋既高何自勞如此夫人日間暇無事禪誦為樂何勞之有偶

「聞龍門誦經□之後每入道場益加損敬至於動容變色左右怪而問之對日不見道雖然暗室無人見自有龍天側耳聽夫人至心所感時見「異香滿室又現象金光一夕夢中恍見彌陀親座其頂以八功德水注於口夫人跪禮嘗之喜驚而寤尚覺甘香在口又時夢法華楞嚴華嚴等「經文記盈筐笥又夢得和歌日補陀落界出現此為度衆生住假世此等之類不□而足郭外數里所漁人載流張若伴潮

水退擬聲取其水族「是晝夫人夢群鱗數萬阿沫相濡若者所訴即覺許之明且遣人按之涅口果見洩罟便命悉贖而放之因此改過歸善者衆矣夫人賞於全心「即佛因緣有自處且日從前用心遂物走作觸途成滯我今大回輕安似卸重擔

分得安樂也爾後日用應緣無諸障礙順違愛憎一忌情「意富貴叢中處之□如諸媼御亦屏去浮靡同志淨業無有異念已卯仲冬十七日示歎疾召諸醫診脉菽日別無陀病侍妾問口不頭痛乎「莫熱惱乎何不呻吟而養神氣答曰我無頭痛亦無熱惱氣息愈秦言咲如常惟食事少減耳臘月十八日吉田醫士自京師至布措良久亦無「□色有勞遠來上未命設香几合掌念佛若熟睡而終壽八十三沒後慈容怡現滿月祖結指爲印如入禪定侍妾給人之輩在哀慟中津

〔この面十六行。「は改行頭。」〕

右面

之梓淚感起嘆未曾有所謂自□陀落土現者信然可證焉逮翌日鎖龕手足柔軟神色如生二十二日祇藏于廣壽山先豐老榮之北十有下「步比際寒候風雪不休是月氣開霽□簇暖霞然與先壹豐君同日同時而逝又伺日同晴而葬可謂奇矣靈□所進七八里間士俗男女盈衢「塞進拳□悲泣震于林野拾遺一家孝義絕至上祭有文詞甚痛切内外親族如藝州太守松平綱長前福岡侍從黒田光之同肥州太守綱政「同藝州太守長清肥後少將細川綱利大學頭藤堂高近大學頭松平頼貞前木付刺史松平英親丹州太守松平重實飛州刺史峰須賀隆重「信州刺史小笠原長圓長州刺史小笠原長定民部少輔小笠原□「清三郎松平正芳等自隣國而至二三千里外差使具香來修尊□夫人「天性叔靜□明不問學而其心自然契□□行亦隨之諸妾無少長懷慈愛慕保抱掖持不離左右而寅畏謹敬不敢少□拾遺日日省候弟「孫環侍其傍□順盡誠而不曾踰□夫人一生日無妾語身無偽行左右或錯失言夫人初無心詰之而問胡為其然則彼皆塊耻流汗浹背以「其實直不可祖欺也子幼而荷夫人撫育視均親子□故得深知其群行之狀拾遺以墓上銘見属因序其然所知大者而為之銘銘日

迹没後定相證其實我勒銘辭鐫斯

白石千百載下讀者宜□

吉元禄十三年歲次庚辰十月丁巳

廣壽住山 比丘 明洞法雲謹撰併書

孝男小笠原中大夫行拾遺羽林監源朝臣忠雄立焉

雜記 初代小倉小笠原藩初代藩主忠眞の夫人であり、二代藩主忠雄の母である。

37 供物台 小倉北区鑄物師町7-2 お堂

元禄十五年□

觀音講中二世

正月十八

雜記 下部が地中に埋まって読めない。

38 慈徳院殿墓 小倉北区豎町一丁目2 安国寺

右面

元禄十五壬午歲六月十日

正面

慈徳院殿 忠山實考大居士

左面

奥州産

伊達市正宗興

雑記 伊達市正宗興は伊達政宗の孫にして、伊達兵部少輔宗勝の子であり、伊達騒動に關連して豊前小倉に配流された。

右面

寶永四壬戌年

正面

是相院法如妙中禪尼墓

西氏亡妻

蓬月齋法橋衣陽先生之碑

左面

五月十五日

九月初二日

40 法雲洞老和尚墓 小倉北区寿山町7-6 廣壽山福聚寺墓地

正面

當山二代法雲洞老和尚之塔

裏面

寶永三年歲次丙戌二月甲辰

實晏實貞

嗣法門人實智等全百拜立石

實龍實光

雑記 墓石に刻まれている當山とは廣壽山福聚寺のことである。

41 良游日長居士碑 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

寶永四丁亥歲

○良游日長居士之碑

正月十九日

42 是相院法如妙中禪尼墓 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

右面

寶永四壬戌年

正面

是相院法如妙中禪尼墓

西氏亡妻

左面

五月十五日

雑記 干支が合わない、再建墓か。

43 一鷗光先生之碑 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

右面

寶永五戊子年

閏正月八日

正面

□ 靈一鷗光先生之碑

44 甕棺蓋石 小倉北区金田一丁目三

一枚目の石

二木勘右衛門正勝

宝永五戊子十二月

初十日六十九歲卒

二枚目の石

法諱號祥雲院

(財)北九州市芸術文化振興財団保管

快翁實慶居士

孝子敬志

雜記 当甕棺蓋石は馬借一丁目の宗玄寺跡の発掘調査で出土した。正勝は小笠原忠雄の土大将であり、家老職を務めた。

45小笠原長胤墓 小倉北区寿山7 広寿山福聚寺墓地

右面

寶永六己丑歳

正面

本源院永巖紹眞第居士

左面

三月二十七日

雜記 中津藩三代藩主小笠原長胤墓である。貞享二年に、長胤は今津、蠣瀬、佐知の干害対策に荒瀬井堰着工の英断を下した。元禄十一年八月幕府から「身の行い悪く、家政も不良なり」という理由で領地八万石を召し上げられ、小倉藩主小笠原忠雄に預けられ小倉で逝去、馬借の臨済宗円照寺に葬られた。明治になって円照寺が廃寺となったので、墓は広寿山福聚寺墓地に移された。

46宮本次郎墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寶永七庚寅年

正面

蓮質玄紅童子之塋

左面

七月廿三日 小名宮本次郎

47妙法壽院妙常日住靈 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

寶永八辛卯年

妙法壽院妙常日住靈

正月二十三日

48宮本則貞之石碑 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

享保元^丙歲六月十七日行年八十歳卒

休圓實性居士

初代宮本八友衛門則貞之石碑

49太叟靈白居士之塔 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

右面

享保元丙申年

正面

太叟靈白居士之塔

左面

九月十八日

50宮本實貞墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

享保二^丁年六月十八日

謙光院仁室宗恕居士之塋

宮本幸右衛門尉源實貞

雑記 当墓は形式などから見て、何時の時期か再建された可能性が極めて高い。

51 鳥居 小倉北区金田 2-1-5 稻荷神社

右柱

奉寄進華表願主 石原識能敬白

正面額

〔無文〕

左柱

奉寄進華表願主氏子中敬白

石原市兵衛

享保六辛丑次龍霜月八莢

52 欄干擬宝珠 八幡東区東田二丁目 4 北九州市立自然史歴史博物館

享保六年

三月吉祥日

雑記 元来は小倉南区室町・常盤橋（大橋）に使用されていた。享保五年閏六月二十一日の洪水で常盤橋は流失し翌年に復旧されている。

53 小笠原忠雄墓 小倉北区寿山七 廣寿山福聚禪寺墓地

正面

照院殿従四位下侍従曉山紹榮公大居士之塋

雑記 小笠原忠眞の三男。寛文四年十二月十日將軍家綱公より忠眞遺領十五万石豊前小倉城を賜る。享保十年六月廿八日豊前小倉城にて死去。七十九歳。

54 蓬月齋法橋海鷗墓 小倉北区熊谷一丁目 27 西家墓地

享保十七壬子年

○蓬月齋法橋海鷗先生

五初三日

雑記 西家の墓の中で最も大きい。九代目の蓬月齋法橋一鷗という。

55 灯塔（一對） 小倉北区清水四丁目 7 真言宗清水寺

右側塔右面

享保七壬寅歳

正面

飛

左面

季春吉祥日

左側塔右面

享保十七年壬子年

正面

講中

左面

季秋吉祥日

56 禁牌石 小倉北区寿山町 廣壽山福聚禪寺山門

正面

不許葷酒入山門

裏面

元文四季歲己未初夏日第七代改立

57 香月牛山先生墓 小倉北区清水四丁目5 円応寺墓地

正面

牛山先生香君之墓

左面

先生諱則真字啓益號牛山筑前人厥初出自香月君狭田彦四十三之後日香月七郎則宗又十六世日六郎諱重貞爲先生考先生小学貝原益軒又師鶴原玄益受方技書極其 遂爲醫及壯遊東事豊中津有男子乳出汁如婦人者舌生毛者産後不穀食唯嗜肉者皆從先生治得愈名益起旁諸大國更請診治從中津候朝而東東諸候及名公鉅儒莫不敬服其術苦學之精者住中津十四年託病而行遊京会大覺親王病舌瘰半年諸醫百万不得効召先生生曰鬱痰用法當吐之諸醫憚其毒爭持不決事聞大上皇上皇詔使從先生言先生乃施其方法吐痰斗余病去言哭復故更調

裏面

兩月而安於是人益信術益行先生在京所相善自伊仁齋諸大儒至諸山高僧名高一時之選莫不納交聲益籍甚四方來受者常百余人先生乃築醫仙堂因揭所欽古先六人各題其至言而其字與扁署皆台閣公鄉爲手書人傳稱爲榮在京十七年 小倉先候聘召不起辟其姪則貫監書記於是先生偕來以客受養老稟給 醫重其術歲加賜与以待之至 小倉今公遇愈盛醫術益及隣國先生復營醫仙堂以居至老書不積手所箸書凡二十三部多行于世年七十五老焉日吾事

畢矣自今而後雖生猶死遊魂行尸其豈與人間乎乃器用財賄悉分諸親故而後卜葬地制棺槨以土伯暉仕小倉同其

右面

業相善請爲志其生平作木牌刻之先生不敢妻妾無子姪則貫先卒其子尚幼先生乞令受業門人貞庵受其稟給以待姪孫長貞庵名則道乃冒香月氏以父養生後十一年先生八十五以元文庚申三月十六日終于小倉葬于國城東円應寺門人共議斷建碑土伯暉之助貞庵遠視其志請余作墓銘先生生平醫傑特異与所著書目皆具門人所傳及伯暉所余略德狀繁之以銘其辭日
術之在人意之在書自西自東名亦不慮

寛保元年辛酉平安服元喬撰 二年壬戌二月上□象弟子同建

雜記 円応寺は東曲輪内堺町六丁目の南にあつた。円應寺の前のとおりは円応寺筋と呼ばれていた。昭和二十八年に現在地（清水四丁目5）へ寺が移転した折に、香月牛山之墓も移設された。北九州市八幡西区吉祥寺に香月牛山の寿藏などあり。

58 宮本實久墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寛保三癸亥年十一月二十五日逝

正面

了徳院柏庭宗樹居士

左面

俗名 宮本氏亘源實久

59 灯塔（一对） 小倉北区篠崎一丁目7 篠崎八幡神社

右側塔

奉寄進 神塔一双

延享三年

左側塔

越中国富山住 葉種屋権七

内寅季冬廿九日

雑記 富山の葉売りの実態がわかる貴重な資料である。

60 芭蕉塚 小倉北区堅町一丁目2 安国寺

右面

一方門人

片海了

正面

芭蕉翁 神墓

左面

正徳二進立申亥今年十九年

裏面

寛永寂元禄七申

酉再寛延三庚午年

□□定門

□□小倉□門

61 天巖祖光童子之塙 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寛延四龍次辛未年

正面

天巖祖光童子之塙

左面

二月十四日逝

62 鳥居 小倉北区篠崎一丁目7 篠崎八幡神社

右柱

非爾事敬非爾意防過者斯比遐擇否減

寛延元年季秋之日神門顛木所摧至今新造

主祠橘敏種誌

正面額

〔無銘〕

左柱

無闔無開來反五方吃乎神門永配天壤

寛延四年歲次辛未六月之吉小倉増勝之謹撰并書越中富山

63 大乘妙經一字一石塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

于時寶曆二之天

正面

大乘妙經一字一石塔

左面

歲丑壬申九月日

裏面

願主住吉屋源七

64 大乘妙典一石一字書寫塔 小倉北区木町三丁目16 普門寺

右面

寶曆四申戌三月十八日

正面

大乘妙典一石一字書寫塔

左面

願主 一透重闔謹書

65 宮本久豪墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寶曆五^{乙亥}年四月八日

正面

玉寛院月鏡智圓居士

左面

宮本九十郎久豪

66 菅原神社鳥居 小倉北区古船場町一 菅原神社

右柱

奉造立華表柱 講中

正面額

菅原神社

左柱

寶曆五乙亥年九月吉祥日

雜記 幕末期と記された『小倉藩士屋敷絵図』には当該地に菅原神社は記されていない。

67 華坊幾曉菴 小倉北区堅町一丁目2 安国寺

右面

享保十六亥〔以下埋まって確認できない〕

二月日

正面

西華坊

幾曉菴

左面

寶曆六〔以下埋まって確認できない〕

四月十一日

68 鳥居 小倉北区須賀町12―24 須賀神社

右柱

寶曆六^{丙子}年九月吉日

正面額

〔無銘〕

左柱

願主氏子中 上富野村
赤坂村

69 水盤 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

正面

寶曆七^丁年

奉寄進

二月吉祥日

裏面

爲菩提奉寄進

江川膳□中□□

70 水盤 小倉北区到津二丁目 到津八幡神社

正面

奉納〔横書〕

裏面

寤曆七^丁歳

二月討初午

71 慈雲院貞心妙潤淨大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寶曆九年己卯

秋八月十一日

正面

慈雲院貞心妙潤淨大姉

72 灯塔（一对） 小倉北区木町三丁目16 普門寺

右塔正面

寶曆十四申六月

左面

世八人 円心 藤八 善即 〔原文、人名横一列〕

左塔正面

同六月

世八人 同

73 奉納大乘妙典 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

一字一石華一香三禮

奉納大乘妙典 全部

明和元年^甲八月

74 宮本君墓碑 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

正面

女^の睦宮本君墓碑〔左文の上段に横書き〕

君諱實彌初号主馬後改伊織老稱春惟宮本氏小倉人也高祖先武州勲謙玄信
〔曾祖先前伊織君諱貞次祖先源左衛門君諱貞信孝幸左衛門君諱實貞源清
且〕家譜幸左衛門君子卯□養三從弟爲嗣乃君也君方嚴以勤恰玄物列上大
夫二一十三年明和五年戊子正月十二日卒□寶永二年乙酉七月二十四日生
六十四〔歳卒于城東武藏之山関山禪師日行爲諡日不破打□近藤氏□子次
郎大羽〔氏中大夫正房女生貞陳息今爲上大夫五郎津氏生自紀今爲歩卒隊
將四郎推〕松氏生一女通中大夫洪田見氏三日乃早夭一女未嫁

俗日 於行乎奈 於□乎瑞

辰或再建 親乎子孫

〔この面九行。「は改行頭。」〕

左面

辛子貞陳謹建

石川剛 謹書

増井勝之謹撰

75 経塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

大悲之□□□□

□□全三十二部経

正面

大乘妙典一部

一石二字塔

普門品三十三卷

左面

普門品三十三奉品国

霊場寫齋迦細者

于時明和八歳九月吉日

願主清澄□右清□湖

76 鳥居 小倉北区妙見山 妙見社上宮

右柱

奉寄進

正面額

〔無銘〕

左柱

安永三甲午春寶積院覺□代

石工辻小兵衛八十郎

77 權大僧都法印靈芝塔 小倉北区菜園場二丁目 協同墓地

右面

賀春山神宮院三世住持

正面

權大僧都法印靈芝塔

左面

安永四_未乙_未八月十七日

雑記 当地に賀春山神宮院があったことがわかる。

78 不許葦酒入山門 小倉北区豎町一丁目2 安国寺

柱正面

不許葦酒入山門

台座右面

台座正面

台座左面

楚白

安永五

門人

此稚

丙申

閑蟬

湖□

三月

可榮

千村

十一日

比柱

可樂

尊權

巴文

渭水

欽建

夕□

79 鳥居 小倉北区下富野一丁目10 天疫神社

右柱

安永六酉年八月

正面額

〔無銘〕

左柱

下富野村氏子中

80 水盤 小倉北区妙見山 妙見社上宮

安永六酉八月吉日

奉寄進

西川氏

亥歳女

81 月心院自澄妙悟日涼大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

正面

月心院自澄妙悟日涼大姉

左面

安永九年庚子六月十五日

82 愛宕神社鳥居 小倉北区採園場二丁目 愛宕神社

右柱

奉寄進華表 講中

正面額

愛宕神社

左柱

安永九庚子仲秋吉旦

雑記 正面額はここ二十年の間に作り替えられた。

83 供養碑 小倉北区長浜 10 | 18 閻魔堂

正面

安永九庚子天 □村崎玉郡

□ 奉中供養夸 □ □ 四國

願主

□ □ 花咲村進

左面

長浜久左門

休意

雑記 閻魔堂は引接庵とも称し、長浜西の丁（砂津三丁目三）にあった。

鹿兒島本線線路変更のため昭和二十八年に当地に移転。その折当供養碑も移されたとみる。

84 灯塔残片 小倉北区須賀町 12 | 24 須賀神社

右面

天明二年^{壬寅}正月吉日

正面

奉寄進

左面

葛原助右工衛門

松屋助左衛門

85 大乘妙經一字一石塔 小倉北区清水四丁目 7 真言宗清水寺

正面

一 香

大乘妙典一字一石塔

一 禮

左面

天明二寅十二月吉日

86 清心院詠月妙耀大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

天明四^甲秋七月廿六日

正面

清心院詠月妙耀大姉

87 水盤 小倉北区須賀町12-24 須賀神社

天明四^甲八月吉日

奉寄進

赤坂村氏子中

88 鳥居残片（二本） 小倉北区萩崎町13番 綿津美神社

右柱

天明五年歲次乙巳孟夏吉祥日

左柱

當村産子中

雜記 綿津美神社ではワイワイ祭りが行われている。

89 法界塔 小倉北区日明五丁目2 日明墓地

上石右面

銘□

德哉願主乘念現前承□

上界分身大千生死寶筏

人天福田一爲臚禮預脱

蘆纏禾稼豐熙家国安

財施法施隋絹送緑業海

法溺尚鼻倒懸接光明輝

同生令蓮 積華選

正面

地藏經日毎日晨朝

入諸定入諸地獄令

半苦無佛世界□衆

生今世後世歲引導

左面

国家安全

五穀成熟

説法結縁

裏面

天明七丁未歲仲冬

下涼進焉

願主 浄土宗心光寺

義誉上人弟子

簾譽盤哲

中石右面

無事菴

東西講中

正面

法界塔〔原文、横書き〕

裏面

惣元活役

博多屋甚助

願誓宗心信士

下台石右面

発起人 江口末治

徳永勝美

協力者

平松町内一同

平松漁業共同組合一同

西昇 江口努

大田貢

大田隆

萩山美恵子

〔原文、五人の名横一列〕

世話人

彦野フミ子

藤島ヨシエ

彦野マツ子

〔原文、人名は横一列〕

施工

(株)長田石材鋳業

一九九八年八月吉日

正面

大正三年調査

施主平松

平松地藏尊〔原文、横書き〕

裏面

地形

宮崎嘉工治

石工八十郎好次

同 松蔵正次

雑記 下台石正面および裏面の銘は大正三年の追刻である。下台石右面には銘文を刻んだ新石材を貼り付けている。当法界塔には、文化年中に小倉小笠原藩で起った白黒騒動で処刑された十名の供養塔で首切り地藏尊との話が、付着している。白黒騒動関係者の処刑がここで行われたからであろう。

90 天倫院鶏眞妙慧日大姉 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

寛政二庚戌年

正面

天倫院鶏眞妙慧日大姉

左面

七月初四日

91 灯塔(一対) 小倉北区金田二丁目5 稲荷神社

右側塔右面

寛政四年子十一月吉□

左面

奉獻

雑記 左側塔にも同銘が刻まれている。

92 辨才天鳥居 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右柱

理看柱門悲濟爲根縁群生寧載感應

維寛政五歲次 丑五日吉日 施主己待講中

正面額

辨才天

左柱

国家安全萬民快樂風雨順時五穀壺饑

豊前企救郡篠崎村青龍山下造立焉 現住孝□

93 庚申供養塔 小倉北区上到津一丁目四 道端

寛政七乙卯正月吉日 講中拾五人

庚申供養塔

94 鳥居 小倉北区妙見17 御祖神社

右柱

奉密 氏子中

正面額

〔無銘〕

左柱

寛政七卯年四月吉日

95 鳥居 小倉北区到津一丁目 到津八幡神社

右柱

寛政九年丁□二月十一日敬白

96 宮本貞陳墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

寛政十一年己未十二月初八日

佚老軒無參木雜居士

前宮本主馬源貞陳

雑記 当墓は形式などから見ても、再建された可能性が極めて高い。

97 興玉神 小倉北区下富野一丁目10 天疫神社

正面

興玉神

裏面

寛政十一未年正月日

98 手水鉢 小倉北区寿山町7-6 廣壽山福聚寺（竜華院前）

奉寄進

手水鉢一基

寛政十二申年仲夏吉日

大畠村若者中

雑記 竜華院は大畠村石原にあった。明治維新になって廃仏稀釈を恐れ
広寿山黒門前（現位置）に移築。その折、当手水鉢も移転されたものと

思われる。

99 妙見宮鳥居 小倉北区妙見17 御祖神社

右柱

享和元年辛酉八月良辰建

當山現住先達龍海法印敬識

石近田中喜助藤原元貫

正面額

妙見宮

左柱

津兮維嶽維神斯降五方所仰神秀所鐘以祝國祚以穰豐登
兩柱拄天以則朝宗有衆洽力以肅以恭以不朽者石維神之封

諸寄進施主繁故畧

100 一字一石塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

一字一石塔

享和二戊三月七日

101 大蓬齋誠□先生之墓 小倉北区熊谷一丁目27 西家墓地

右面

享和二壬戌歲六月五日

正面

大蓬齋誠□先生之墓

102 鳥居殘片 小倉北区菜園場二丁目2 愛宕神社

右柱

景福至今歲□豊

左柱

□民□今神之功

享和二^{壬戌}歲十一月

103 篠崎八幡宮鳥居 小倉北区篠崎一丁目7 篠崎八幡神社

右柱

高雄之阿 保神聖于秋之和

享和二^{壬戌}年歲次壬戌季之吉

正面額

篠崎八幡宮

左柱

八幡之靈遺明德万歲□

主祠 橘江謹建

石工 藤原元貫

104 水盤 小倉北区船場六丁目12 瑜伽神社

右面

享和三亥十月廿一日

正面

奉寄進

左面

西八百屋町 長門屋亥平男

105 水盤 小倉北区長浜2 貴船神社

享味四歳

甲子正月

奉寄進

長濱

106 鳥居 小倉北区到津二丁目 錦春稲荷神社

右柱

文化二乙丑年二月初午

正面額

〔無銘〕

左柱

御家中寄進

雑記 錦春稲荷神社は江戸の水戸家後楽園錦春門内に祭られていた。その地が東京砲兵工廠となる。昭和八年十月に小倉工廠として小倉に移転した折、錦春稲荷神社の御神体をはじめ鳥居なども小倉工廠の中に移された。昭和二十一年小倉工廠跡地は連合軍により接収されたのを期に当鳥居は現在地に移された。文中の家中は水戸家中である。

107 猿田彦大神 小倉北区清水五丁目8 道端

講中

猿田彦大神

文化三丙寅年

雑記 江戸時代、小倉から黒崎に至る主要道（小倉道）の道端にある。

108 芭蕉碑 小倉北区上富野四丁目2 延命寺

正面

芭蕉翁

古池や蛙飛込水乃音

裏面

文化四丁未年

季春十二日

109 宮本貞則墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

文化四^丁卯^卯歲七月四日

正面

善通軒大乘道機居士

左面

六代宮本主馬源貞則

110 大乘妙典一字一石 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

文化五戊辰年八月吉日

正面

大乘妙典一字一石

左面

施主姓名有此蓋石裏

111 宮本貞諧墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

文化六己年十一月廿八日

正面

常勝軒白巖道靈居士

左面

七代 宮本五郎源貞諧

右面

當之說專以刺絡燒鍼灌水慰羽翼三方暇則集生徒講論其「撰著有生生治驗方二冊已梓行德瘡論未脫稿又有詒謀錄起「草未完蓋奉乃翁命并記其治方功逼也其學之優論之卓就自序「中可觀弁何意一朝罹疾溘焉逝無者莫不□惜其疾也自歎方「而服之及其劇有請延醫者輒日醫不能自治安能醫人竟不肯几「在蓐幾一歲門人某輩代侍湯藥不令婦女近其志之烈如是實「文化六年己巳冬十二月四日也享年三十五歲配安藤氏生一女「屬者翁且事狀乞銘其墓因為叙其世系志行之

〔この面十六行。「は改行頭。」〕

112 小野匡輔墓 小倉北区鑄物師町 4・8 長圓寺

正面

匡輔小野君之墓

左面

小野匡輔碑銘

君名遜字匡輔号鼎山姓長嶋氏按系六世祖諱玄也信州人也

先公之移封于明石于小倉也随徒焉後賜祿百五十石列上士過

祖諱正勝為大阪邸監祖諱喜正罷仕業醫于田間其子好問乃君父玄亭翁也翁

冒小野氏以醫侍

裏面

雲関公友

今公頗蒙寵看翁娶今井氏生君幼聰敏長克承家訓孜孜攻業年「二十遊學

京師擇師無中其意者晚得生生堂中神先生而事之為「其所愛頗傳秘旨婦又

遊筑南冥龜井先生之門既而翁告老而退「君襲其職以師授未盡乞暇再都業

逾勤志逾篤時年二十有五「今公竣二條之戌而東也扈赴江戶居一年告疾而

婦蓋以有所志也「因乞 官醫柴田君門人名養本嗣其職居家助乃翁醫事多

有奇「効不先貴顯而後貧賤不顧 鼎譽一意在救活不所宋元以降五行「配

擇師而学

才茂術精

春秋之富

志期大成

復婦者骨

不眠者名

魂無不之 屹者佳城

雜記 小野匡輔は医師であり、儒学者である。

113 玄覽増井先生之墓 小倉北区鑄物師町 立法寺墓地

正面

玄覽増井先生之墓

左面

君諱勝之字彦敬號玄覽齋考日松本正昔娶

高濱氏生四男君其季也出為増井諱重之嗣師

事麟洲石川先生篤学自性不特勸勉識聞之

卓□文辭之當瞻碩儒無加焉先生災命繼其

識教授子弟君之教人寬優不福善誘躬令

人々自勵是以諸生皆樂業薰化以勞屢加等級
裏面

賜祿百石安永癸巳八月八日暴病卒享年五十
三歲配鹽三氏無子養外兄福田氏子勝千爲嗣
君天資仁厚孝友篤至其量汪濇巨測和氣粹然
性興佗嗜玩獨好酒及揮筆一斂輒醉輒揮酒
累紙立盡居貧上漏下濕披卷晏如蓋有古長者
風矣

右墓誌并銘平安上柳四明先生撰安永乙未
右面

建勅之經年石泐字闕漫漶難辨因代以堅材
再立之原文凡千二百四十八字今投其要刻
之如全文則謄寫裝潢藏之寺中

文化七年庚午四月再建

俊嗣 方恪謹誌

雜記 増井勝之の字は彦敬、号は玄覽という。本姓は松本氏、出て増井
氏の嗣となる。小倉藩の儒官である。

114常盤橋橋脚 八幡東区東田二丁目4 北九州市自然史歴史博物館

文化十四年 三本之内

爲試建之

□

雜記 小倉北区室町・紫川に架かる常盤橋に使われていた。当橋脚は花

崗岩を用いている。橋脚は、花崗岩製や木製のもので、約三〇本あった。
なお、北九州市自然史歴史博物館保管橋脚は発掘調査されたもので旧天
神小学校に仮置きされた後に、北九州市自然史歴史博物館に持ち込まれ
た。

115常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋
文化十四年 爲試建之 三本之内

雜記 平成九年発刊『小倉城下町調査報告』に当橋脚は小倉北区西港町
15-52（北九州市材料検査試験場）に置かれていると記されている。し
かし、平成二十二年八月四日時点では確認できない。銘文は『小倉城下
町調査報告』によった。

116乗妙典一字一石 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

施主 中村英信

正面

大乘妙典一字一石

左面

文化十二乙亥二月吉日

117猿田彦大神 小倉北区船場六丁目12 瑜伽神社

右面

文化十二乙亥五月吉日

油屋久八
長濱屋由蔵

米屋新五郎

濱田屋武七

油屋亀治郎

大野井屋太七

大里屋和作

石見屋嘉十良

飴屋吉治郎

白井屋定治郎

石工八十郎

文化十三子五月

119 水盤 小倉北区長浜 10-18 閻魔堂

文化十三子六月

奉献

施主 庵主寂心代

石屋善七

正面
猿田彦大神

118 塔 小倉北区清水四丁目 7 真言宗清水寺

右側右面

安田□貞

平松吉英

久保貞茂

上原茂周

〔原文、人名は横一列〕

正面

献燈

裏面

文化十三子五月

左側正面

献燈

左面

富久寄秀

平松政介

□田真□

木村□□

〔原文、人名は横一列〕

裏面

雑記 閻魔堂は引接庵とも称し、長浜西の丁（砂津三丁目3）にあった。鹿兒島本線線路変更のため昭和二十八年に当地に移転。その折当水盤も移されたとみる。

120 方圓齋碑 小倉北区清水四丁目 7 真言宗清水寺

右面

男

直守身 和州

京都 播州

江戸 豫州

方圓齋門子 大坂 筑州 一千九百三十四人全建

奥州 肥州

賀州 小倉

正面

方圓

方圓者天地陰陽也異同相應虛實相依得矢在其中若夫變化自由智之事而貴圓一定不動仁之體而要方非悟道之人雖共言也

今當從 浦野一步齋先生學制一流之武技遂得其印可

然而未以爲自足將盡天下之武技家以爲我羽翼拾是乎習
得十有五流各極其源無復有若我制剛之機者雖然我制剛

之爲技也實是向止之一路非末世根氣者所能及也以故

余斟酌制剛之要與諸家之萃以建我圓正宗不敢自專實

諸先師拳以授弟子等先師喜而後可知也實天明二

壬寅之歲也今茲戊寅夏四月諸弟子等請刻石以傳

不朽余不得辭敬告先師之靈以授弟子等云爾

文化十五年歲次戊寅夏四月吉日

國前直菟手彦遠裔

方圓齋直守一職

雜記 生往寺に方圓齋先生墓（148）がある。

121 乗妙典六十六部一國一仏供塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

文政三辰四月吉日

正面

天下大平因爲岩井郡

奉納大乘妙典六十六部一國一仏供塔

日月清明禎大谷村行者源六

左面

秋町□□藤右工門

世話人 三郎丸村利兵衛

片野村弥三郎

同 村利兵工

122 法華石書塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

門弟中

正面

法華石書塔

裏面

嗚呼先生訓誘得宜

書法歲重真一世師

左面

關明堂先生姓楢原諱秀近称源左工門學

寺澤氏書法究其妙年十六以□□授人為

人温良慈愛弟子悦服文政庚辰季冬念一

疾没群弟子不堪哀慕爲書寫法華經於一

字一石積爲全部藏諸清水寺邊而碑焉且

記銘於碑背傳其名於不朽云銘日

雜記 書家楢原秀近を讚える碑。楢原秀近は文化八年韓客使節来日の折、

藩主に従う。韓客に対する返翰等の多くは秀近の手によるといふ。

123 津山利金之輔墓 小倉北区鑄物師町4 長圓寺墓地

右面

文政四年辛巳四月六日

大津山利金之輔平信重

小倉門人建

正面

新以心流〔左文上に右から横書き〕

二世養勇軒先生之墓

雑記 大津山信時方眼齋また今齋と言う。本姓は渡邊氏。小倉藩士である。武道を三井知卿に学び諸州を歴遊して、有馬侯に客仕し、姓を大津山に改める。後に小倉に帰り知卿より一子相伝の術、一無決可の法を受けて別に新以心流を創設する。

124 石段 小倉北区妙見17 御祖神社

右側柱正面

高木宇左工門

谷村太郎七

山田茂次郎

發起 伊川古右工門

内山登助

三浦九郎次

松屋弾助

裏面

以他力成就

明石屋利助

米町 蛭子夜勘七

世話 蛭子屋助次郎

一丁目 豊後屋多吉

左面

文政四辛巳三月吉日

125 金剛力士像(一対) 小倉北区上富野四丁目2 延命寺

阿形像台石正面

得勝増

長怨

負則益

憂若

台石裏面

故金剛石像一

對者申斐子所

建也壬子秋為

風所毀是桑

右衛門和四郎

與邑里同志者

繼而建之

文政辛巳季冬

卍形像台石正面

不諍勝

負者

其落最

第一

台石裏面

故像者夷

法橋甚蔵

作幸己之

冬男貞四

郎門人善

三郎再造

以教先師

之遺意

126 南無觀世音菩薩 小倉北区妙見17 御祖神社

正面

南無觀世音菩薩

左面

妙道無象感而善應慈海有

吉田嘉兵衛氏信

春熙物廣被爰安 法像虎

我有佐次兵衛一暉

薦誠懇卯頭 在上萬壽國家

宮秋桓吉況直

豊奉蒼□保遂生之休溥□植

中村九平孝道

而均祐依請明霽幸昭鑿焉

嶋田蔵保設

文政壬午春三月

裏面

原田種蔵定連 木下賀右衛門守勝 上野武兵衛久治

引田定助茂辰 鶴嶋隆助寛林 〔この面原文、人名は横一列〕

右面

兒崎初右衛門榮一 米倉宅右衛門菊高 永井勝右衛門重種

大嶋爲左衛門賀久 大束勝之助母 佐村氏母

〔この面原文、人名は横一列〕

127 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

文政五壬午年 大池徳工門良信

九月吉日 洪田見興右工門□之

雜記 現在常盤橋西側に置かれている。

128 瑜伽神社鳥居 小倉北区船場六丁目12 瑜伽神社

右柱

徳澤決庶物

昭和三年七月再建之

正面額

瑜伽神社

左柱

恵風扇億年

文政六歳癸未仲春之日

129 石段寄進 小倉北区須賀町12―24 須賀神社

石段下右側石柱正面

願主 □□□

左面

文政六年未正月吉日

石段下側左柱右面

石工 藤助

正面

上富野村

赤坂邑

石段上右側石柱左面

文政六年

石段上左側石柱右面

未正月吉日

正面

吉田□村

赤坂村

130 経塔 小倉北区菜園場二丁目2 愛宕神社

右面

文政六^亥未^未歳

正面

法華書寫塔

左面

願主 今宵庵再見

雑記 古い一石一字経塚の上に立てられている。

131 報善院永室日昌大姉墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

文政八乙酉年

三月十八日

正面

報善院永室日昌大姉

左面

宮本主馬貞則室

132 灯塔 小倉北区古船場町一 菅原神社

柱右面

文政七年歳

柱正面

永代 常夜燈

左面

次甲 申冬十月

台右正面

有賀新所 村上高知 平尾弘充 永末尚守

安藤勝興 林佳武 谷村久行 木下永益

湯口祐業 山田表近 [原文、人名は横一列]

台右裏面

緒方高茂 木村保□ 恒任吉長 山田理明

高木良積 伊川義道 安藤吉明 林祐壽

中川良稟 [原文、人名は横一列]

雑記 江戸期、当該地に吉祥寺があり、神仏習合の形で吉祥寺境内(当地)に菅原神社はあった。

133 宮本互貞敦墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

文政八乙酉年十二月六日

正面

玉林院雪溪義冰居士

左面

四代 宮本互貞敦

134 花塚 小倉北区堅町二丁目2 安国寺

正面

花塚

裏面

文政九年五月吉日

真古流城西會中

雑記 生花無雙真古流は室町八代將軍足利義政公を開祖とし、今も京都府慈照寺銀閣にて伝授されている。当碑に記す真古流とは無雙真古流のことと思う。ご教示を願う。『龍吟成夢』に豊前小倉城下の生花真古流の師匠たちのことが記されている。

135 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

文政九丙戌歳十月吉日

雑記 銘文は平成八年発刊『足立山山麓資源基礎調査報告』によった。『同調査報告』に当橋脚は小倉北区妙見の足立公園のグリーンバンク（現キャンプ場駐車場）に置かれていると、記しているも原物の確認ができない。

136 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

文政九丙戌年十月吉日

雑記 銘文は平成八年発刊『足立山山麓資源基礎調査報告』によった。『同調査報告』に当橋脚が小倉北区西港町15-52（北九州市材料検査試験場）に置かれていると記されているも、平成二十二年八月四日時点では原物を確認できない。

137 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

△文政十丁亥歳

建之三木内

雑記 現在は小倉南区蒲生四丁目9の香月氏の門柱として再利用されている。

138 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

文政十丁亥歳

建之三木内

雑記 現在は小倉北区寿山町2-32の酒井石材店の門柱として再利用されている。

139 歌塚 小倉北区妙見町 御祖神社

正面

奉鎮

錦織翁奇魂

裏面

言卷文恐夜皇御国乃国風乃年経流随仁有良奴骨仁移比叙流

事乎慷慨天縣居大人乃普久論志広久道志我翁又其教乎

守良比天脳伝倍能示志給志可波此豊国仁志天歌学比爲人文漸其

正伎筋乎辨奴流事止波成仁太里故翁乎慕比尊美合倍人人止

相議天其幸魂乃寄魂乎迎奉鎮奉天二月乃十三日乎毎年

仁齋奉禰奉乃辰止定免此処仁詣来此処仁集比天彌益此

国風乃常磐仁堅磐仁榮行無事乎仰乞禱無事乃由乎秋山

光彪恐美恐美文誌置仁奈文有介流

文政十年二月十三日 西田直養書

雑記 豊前歌人の重鎮秋山光彪が先師錦織翁村田春海の十七回忌に建て

た歌塚である。元位置から約八十メートル移動している。

140 経塔 小倉北区菜園場二丁目2 愛宕神社

右面

文政十一戊子歳四月

正面

法華書寫塔

左面

岩松氏

141 清雲院殿墓 小倉北区堅町一丁目2 安国寺

出羽國□□□義直爲□□□山形□□□敬白

損館 清雲院殿前甲州太守聖山壽堅大居士

雑記 最上甲斐守光直の墓とされている。光直は寛永六年五月二十二日

に豊前小倉で亡くなっている。當墓は形式的に江戸時代後期の形(剣先

形の頭)であることと清雲院殿位牌銘(『小倉市誌上巻』から勘案する

と、文政十一年二百回忌之節に建て替えられたと考える。清雲院殿位牌

ついで安国寺に尋ねたところ、お寺関係者で見た人がいないとのことで

ある。『小倉市誌上巻』記載の清雲院殿位牌銘は次のとおりである。

正面

清雲院殿前甲州太守聖山壽堅大居士寛永六己巳年五月二十二日。

裏面

羽州最上山形之住源義直事出離頓證菩提 孝子山形孫一郎敬白 文政

十一年二百回忌之節從居士八世之孫肥後熊本細川之臣橋岡七左衛門尉源

義 維追福者也

142 常盤橋橋脚 小倉北区室町 紫川中常盤橋

天保三年壬辰六月寅日建之

雑記 当橋脚は小倉北区上富野四丁目の故藏内忠三氏宅に保管されてい

た。今もこの地に埋まっているとのことである。銘文は『足立山麓文化

資源基礎調査報告書』によった。

143 経塔 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右面

天保十己亥年九月

正面

奉書寫大乘妙典一部

浄土三部經一字一石

左面

清澄瀬兵衛徳能

144 灯塔 小倉北区須賀町12-24 須賀神社

正面

奉献

裏面

天保十一年子九月

上富野村若蓮中

雑記 文久二年の灯塔(161)と二対になっている。

145 狐象(二対) 倉北区到津一丁目 到津神社境

正面

御守殿〔横書き〕

裏面

天保十一庚子年九月

雑記 二体ともに同銘が刻まれている。隣接する錦春稻荷神社の宝物とされている。錦春稻荷神社は江戸の水戸家後楽園錦春門内に祭られていた。その地が東京砲兵工廠となり、昭和八年十月に小倉工廠として小倉に移転した折、錦春稻荷神社の御神体をはじめ鳥居なども小倉工廠の中に移された。昭和二十一年小倉工廠跡地は連合軍により接収されたのちに現在地に移された。とすれば、元位置は江戸の水戸家後楽園である。

146 經王塔 小倉北区堅町一丁目2 安国寺

正面

經王塔

裏面

天保十二年辛丑仲冬日

147 金毘羅社鳥居 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

右柱

武運長久

正面額

金毘羅社

左面

國家安全

弘化二乙巳歲三月吉日再建

雑記 寺に鳥居があるのは神仏習合の名残である。

148 方圓齋先生墓 小倉北区京町 生徃寺境内

右面

序其世系事跡之大畧而爲之銘曰

源深流遠 季世得人 帷忠帷孝 誰是比倫

執弓提力 變化有神 十有六法 各窮其真

別立家法 最稱精純 三千門弟 欲進交遼

武門之鑑 國家之碩 令名彰著 永々無垠

養徳沙門魯山撰之 門人柏木武穎撰書

于時弘化二年 門人建之

乙巳冬十月

正面

二世 德譽如雲居士

方圓齋先生墓

三世 一峯軒不白居士

左面

君名守一字士敬松本直常之五男也魚住植行養

以爲嗣致仕之后冒祖母姓直氏直氏系於國前直

菟名手彦之遠裔蓋一家一所口碑伝君幼而志武技

甫七歲在香春時師神宮院法印靈芝等書至穎□

也院庭有大樹學書之服則以釘擲之蓋習手建設

也万有忠武之意推以可知十五歲師浦野一步齋

而講武技焉了事享役和詩家迺十六流之綵輿且喜

射斟酌諸家之秘而別開方圓一流入門而學之者

裏面

蓋三千上堂入室者頗多矣天保十四年癸卯十月

十日卒時年九十三臨終援律書行法俟命四字今

石刻與門人君屋恒舞小木劍不舍到易書猶一日

雖疾病而仰臥坦腹唯練武之工夫而已亦無他念

也平生喻門人以忠孝偶有談勝敗音則日勝敗天

也所守在一心矣君早失父事母孝謹也鄉黨隣里

稱之特達公聞於戲如君者實是藩中之良器而

武人之標準也弘化乙巳秋門人某書行實以示予

求銘其墓予雖不知君而聞其名也久不敢辭不敏序

雜記 清水寺に直方圓齋碑(120)がある。

149 灯塔 小倉北区妙見17 御祖神社

火室右面

田川

御米船中

柱右面

嘉永二年酉二月吉日

正面

奉獻

左面

御藏仲間中

裏面

發起 嶋屋

世 米吉

話 油屋

人 米吉

台石下から四段目正面

上荷

小渡 中

台石下から三段目正面

博多屋

米 良助

芳野屋

問 閨助
若田屋
屋 武助
鞆屋
中 徳衛
米屋
仁兵衛
台石下から二段目右面
北國屋
彦三良
池田屋
清藏
白酒屋
浅治良
正面
隅屋
幸吉
津田屋
與吉
恒見屋
定吉
左面
濱
仲間中
裏面

和泉屋
又正
台石下から一段目右面
山鹿屋
喜兵衛
正面
蛭子屋
甚藏
魚屋
太助
播磨屋
甚吉
左面
大処屋
善治
若松屋
又□
田三
小佐屋
□治
裏面
津田屋
庄吉
河口屋
清兵衛

□屋
茂□

150 自得齋墓 小倉北区鑄物師町 立法寺

嘉永三年庚戌五月十二日

自得齋熙純日勝居士

古市勝芳墓

雑記 古市氏の祖は河内国古市郡の出。初代胤榮は田村珠光を師とし茶道の奥義を極める。四代古市了和（勝元）は、寛永四年はじめて小笠原忠真に仕える。小笠原忠真に従い承應三年豊前小倉移り、二百石で小笠原藩の茶道師範となる。当墓の主十一代古市自得齋（勝芳）は文化三年に、病死した父の跡を若くして継ぐ、古市家中興の人と言われた。

151 水盤 小倉北区清水四丁目7 真言宗清水寺

末吉氏内

嘉永四亥 大戸氏内

中村氏内

女講中 □□□内

田中氏内

五月吉日 和泉屋内

丸 屋内

□□田

152 常夜燈（一对） 小倉北区上到津二丁目 到津八幡神社参道

右側燈右面

津田平三郎柔嘉

小森爲右衛門爲延

今村宗右衛門文儀

正面

常夜燈

左面

企救郡中

裏面

嘉永五壬子閏二月

左側燈右面

企救郡中

正面

常夜燈

左面

片野彦次郎貞高

富野幾之助富羽

城野武右衛門宗重

裏面

嘉永五壬子閏二月

雑記 雨乞い、日乞いの靈験あらたかだったので、御礼のために建立と言う。

153 八代目宮本伊織墓 小倉北区赤坂四丁目 宮本家墓地

右面

八代目 宮本伊織貞章

正面

番裕軒静山不動居士

左面

安政二歳卯八月二十四日

154 狛犬（一对） 小倉北区妙見17 御祖神社

右側上台石左面

安政六未五月吉日

裏面

奉

右側下台石裏面

□□

弥七 □□ 勇治良 利右門 龜右工門

〔原文、人名は横一列〕

御□

小平 藤右工門 清七 銚甚良 助右工門 長右工門

音蔵 重蔵 房吉 直八 勘七 小右工門 兵右工門

庄治良 定治良 〔原文、人名は横一列〕

左側上台石正面

高嶋甫救

濱庄救保

裏面

献

左側下台石裏面

御草□永

弥右工門 武吉工門 典七 宗□エ 嘉吉工門 良平

十右工門 甚七 利喜 助七 〔原文、人名は横一列〕

御道良

平□ 義兵二 民平 牢右工門 益左工門 助治工門

由右工門 助七 〔原文、人名は横一列〕

御租

恒右工門 豊母 良女

155 鳥居 小倉北区中井一丁目29 貴船神社

右柱

屹乎巖前誰不靈徳

安政六年歳次己未十月之吉

正面額

〔無銘〕

左柱

灑然寂寞自可蒙景福

156 灯塔（一对） 小倉北区黒原一丁目40 本通寺

右側正面

施主

善解□良清禅定門

土屋文内

左面

安政□未暦相秋 獻燈

左側右面

當院七世経時建之

正面

施主

寄□禪禎徳禪尼

山中□母

雑記 寄墓の中にある。文と形態から一對と判断した。

157 鳥居 小倉北区船場六丁目12 瑜伽神社

右柱

徳于今臨海握

正面額

大黒神社〔造り替え〕

左柱

名従古與山高

天野信藏

安政六巳未歳六月吉日

松田治□

中村貞幹

明石次信

岡野太真

雑記 正面額は新しく造り替えられている。

158 狛犬(一對) 小倉北区妙見山 妙見社上宮

右側右面

小倉石工畑仲□□

正面

奉

左面

企救郡津田手永

上長野村

松井彦五郎納隆

七ツ月戌

左側右面

企救郡津田手永

上長野村

松井彦五郎納隆

七ツ月戌

正面

獻

左面

安政七申三月吉日

159 小笠原忠嘉墓 小倉北区寿山町 広寿山福聚禪寺墓地

義峯院殿高鑑道隆公大居士之塋

雑記 忠嘉は分家篠崎侯小笠原貞哲の四男。嘉永四年五月篠崎侯となるが、翌七年忠徴の養子となり、安政三年小倉侯となる。萬延元年六月廿

〔原文、人名は横一列〕

164 水盤 小倉北区萩崎町 6 番 札所

右面

元治二年

乙丑春日

造之

正面

奉献 〔原文、横書き〕

裏面

□ 永五郎治衛門直方 村上銀治衛門胤□

岡野権左衛門太實 中原嘉右衛門保倫

安倍七郎兵正美

〔裏面原文人名横一列〕

165 小笠原忠幹墓 小倉北区寿山町 広寿山福聚禪寺墓地

忠幹寺殿従四位侍従泰巖義秀公大居士塋

雑記 忠幹は播州安志小笠原長武の二男である。天保十年に安志侯となつたが、萬延元年十一月小倉藩小笠原忠嘉の遺領を継ぐ。慶應元年九月六日、三十九歳で死去。

166 甕棺蓋石 小倉北区金田一丁目 3 (財) 北九州市芸術文化振興財団

蓋石

顯祖妣戒源孺人墓誌

顯祖妣戒源孺人諱定子初諱銀

子後改幸子又改今諱

瑞巖公御女以寛政二庚戌年四

月廿六日生於江戸小石川邸文

化九戌申年六月拾五日

公命歸祖父長明君尋行婚姻之

儀時年廿三生二男一女長節父

親長享君継家次女早天次男又

夭慶應二丙寅年三月廿六日夜

酉刻半以病而逝時年七十七厥

九日夜酉刻下葬宗玄寺先塋

之次 孫男長民謹誌

雑記 当甕棺蓋石は馬借一丁目宗玄寺墓地の発掘調査で出土した。定子は朝鮮通信使供応正使を勤めた小笠原忠固の娘で、小笠原藏人に嫁いだ。

167 兵隊戦死墓 小倉北区上富野四丁目 2 延命寺

右面

丙寅八月建之

正面

兵隊戦死墓

雑記 慶應二年七月二十七日に赤坂、延命寺での長州軍と熊本藩軍を主力とする幕府方軍との激突で長州軍は死傷者百十四人を出した。その慰霊の墓である。この後熊本藩の撤退で幕府軍は総崩れとなる。

168 長州奇兵隊戦死墓 小倉北区赤坂二丁目
左面

慶應二年八月建之

正面

長州奇兵隊戦死墓

雑記 慶應二丙寅年七月二十七日に赤坂、延命寺で長州軍と熊本藩軍を
主力とする幕府方軍との激突で死亡した長州軍戦死者の墓である。この
後熊本藩の撤退で幕府軍は総崩れとなる。